2009年(平成21年)1月5日　月曜日　日刊工業新聞

産業春秋

今年はマネジメントの父、ピーター・ドラッカー氏の生誕100年にあたる。経営理論の研究と実践をすすめるドラッカー学会は東京と北海道で記念事業を行う。今も人気は根強い。「新刊は必ず一定の部数がはける」と書店の売り場担当者。不況になるほどビジネスマンや経営者に聖書のように読み親しまれるそうだ▼水墨画など日本文化に通じていたドラッカー氏。「すべての文明、あるいは国の中で、日本だけは目よりも心で接することによって理解できる国」。名言集の日本評は敬意とぬくもりにあふれる▼急展開の景気悪化のもと、言霊をないがしろにする事態が起こっている。電話一本、紙切れ一枚で採用内定や派遣契約を取り消す企業。炊き出しを待つ失業者の長い列。100万円の支度金で企業に雇用を迫る政府。利益が最終目的化し、人は組織の道具に成り下がるのか▼「日本の解決が他の国のモデルになる」。バブル崩壊後の危機をどう乗り切るかで、ドラッカー氏はコミュニティーや調和を維持し、忠誠心の高い労働者のいる日本こそ世界の手本になると説いた▼「日本人は悲観することはない」。経営学の巨人は天上から今も希望と勇気を注いでくれているだろうか。「近代的ではあっても西洋的ではない日本」の価値を見つめなおす機会にしたい。